ＯＤ問題議案書

広島大学　原子核パート

近年、ＯＤ問題をめぐる状況に大きな変化はみられないものの、部分的には改善の方向に向かっている。たとえば、学振の採用枠がここ数年で２倍近くに増えている。しかし、現在の学振におけるＯＤへの経済的援助はあくまで暫定的な策であることを忘れるべきではないだろう。ＯＤ問題の本質が日本の学術体制上の矛盾にある以上（具体的には、研究・教育の場における若手研究者の不足とＯＤの慢性的な増加という矛盾）、根本的な解決への道はまだ遠いものと思われる。

【活動報告】秋の総会で掲げた「若手内での啓蒙」を目的として、今期前半は以下のような活動を行なった。

（１）「教育白書」、「学校基本調査報告書」等からの資料の収集

（２）（１）の資料、並びに「ＯＤ白書」などの過去の資料・文献に基づく勉強会

また現在、この結果に基づいて簡単な資料を作成中である。（春の総会で配布の予定）

【今後の活動】以下のことを予定している。

上記の活動　１）を継続して、統計的な資料の作成に努める。

その他の活動に関しては、現在まだ検討中である。

報告

M大連（マスター大学連絡機関）議案書

'90 春　　M大連事務局　埼玉大

1．活動報告（中間報告）

①M大連ルーチンワークの確認

(1)事務局・・・埼玉大学（サポーター役として金沢大学）
(2)D大編入アンケート（編入体験アンケートを含む）・・・奈良女子大学
(3)研究室紹介・・・茨城大学
(4)研究紹介(Prog. Mast.)・・・富山大学

②これまでの活動

M大の間の交流を深めるということが、M大連活動の基本方針についてのコンセンサスでした。事務局では金沢大学のサポートを得て、M大連ニュースの発行をはじめとする活動をしてきました。M大連ニュースは、秋のM大連総会案内号及び報告号の二つの号を発行し、その内容は、”楽しめるM大連ニュース”を目指しました。また、M大連ニュースの発送にあたり、返信用葉書を同封し、ニュースの記事を内容を問わず広く募集しました。

他のルーチンワークに関しては、今のところ富山大学が活動しておられまして、研究紹介＝Prog. Mast.が近く発行される予定です（3/5現在）

ただ、事務局としては、葉書などの返答を求めたにもかかわらず、反応が少ないことを憂いております。また、研究紹介＝Prog. Mast.の原稿の集まり具合いもよくない状況です。Prog. Mast.については、原稿を募集する時期が不適当であったとの指摘を金沢大学からいただいており、来期にはもう一度検討する必要があります。

2．今後の活動方針

残りのルーチンワークである研究室紹介及びD大編入アンケートを確実に実施することがまず第一に挙げられます。また、事務局としては、春に、新M1に対して、M大連の案内を行います。

1．の活動報告で指摘したように、相変わらず、M大全体としての活動のactivityは低い状況が続いており、この状況を打開することが最大の課題と言えます。何か妙案はないものでしょうか。M大の人たちには、もう少しだけ関心を持ってもらい、研究室紹介及びM大連ニュースの記事の原稿を書くなどの協力を望んでいます。M大の間の交流を深めるという方針が実のあるものになるようにしたいと思います。

若手活動議案書　　京都大学

【活動方針】

'８９年度秋の学会に於て当センターは今期の若手活動方針として、

① 諸 abstract の発行

② 三者体制見直しの可能性についての検討

をあげた。

【センター活動報告】

これまでのセンターの活動として、各研究機関への補助要請、及び、予算作成を行った。これらはほぼ例年通りである。

○補助要請を行った研究機関

　基研、ＲＣＮＰ、核研、核物理委員会

○今後補助要請を行う予定の研究機関

　ＫＥＫ

○予算案 ——→ 予算の送金について。　時期・方法 → 予算案承認後

　別紙参照

【若手活動報告】

センターニュース　Ｎｏ．１（秋の学会報告号）及び　Ｎｏ．２（前私大問題アンケート結果報告）を発行した。修論 abstract、及び、研究 abstract については、センターニュース　Ｎｏ．２　において投稿を呼びかけている。

また、基研研究部員推薦を行った。今年度は、２名の推薦を行ったが、結果は２名とも落選となった。この原因としては次のような点があげられる。①２名推薦のため票割れを起こした。（１名は次点であり、１名のみの推薦であれば当選していたものと推測される。）②合併問題に際して当選ラインが上昇した。③若手内部への根回しが不十分であった。④'三者若手推薦'でなく、'センター推薦'の形になってしまい、staff 側の共感が得られなかった。

【三者体制改変についての可能性】

基研・理論研合併によって、現在の基研の約２倍の規模の研究所が生まれることになり、実行不可能としての予算規模も大幅に増えることが予想される。三者若手にとっての一つの可能性として、この時期に夏の学校の拡充　---　例えば外国人講師の招聘などの可能性を含んだ---　を考えることが出来よう。こうした変革を真剣に考え、実行していくためには working group の設置が不可欠である。しかしながら、現在以上のサテライトを作ることは困難であり、サテライトの統合を行う必要がある。

これらは、すべて'可能性がある'というだけの段階であるが、今後三者若手の進む方向を議論する上での一つの材料としたい。